

地方の情報ビジネス起し

テレワーク

財団法人白鷹町アルカディア財団

太田荘一郎



先日、「ヤフー」の株価が一億円を超えたとのニュースが大きく報道された。アメリカの情報産業の経済規模が、自動車産業と肩を並べたそうである。ここ十年で、全米自動車産業と同じ規模のお金がアメリカ経済にプラスされたのであれば、アメリカの好景気も理解できる。と同時に、白鷹に住んでいる我々にとっては、別世界の出来事に思え、またぞろ若い人たちは夢を求めて都会に出て行ってしまっただろうなと思ったりもする。でも、過去に経験した、一方通行現象が再現されるのであろうか？

現在、ソフト開発の仕事は七五%が東京に発注されているそうである。異常な一極集中であり、それに伴うエンジニアも東京近辺に集中している。この分野では大阪も名古屋も仙台も認知されておらず、この種の仕事は東京でしか出来ないと思われるらしい。まして、山形県白鷹町など問題外の外の外である。実は、これには訳がある。

ちよっと前までは大型コンピューターが主

であり、大型であるため持ち運びが出来ずクライアントの傍にコンピューターを持ち込み、開発技術者はその周りに張り付いて開発するという手法をとってきた。当時、大半のクライアントが東京に存在したため、必然的にエンジニアも東京に集中し、その後発生する仕事もエンジニアの集中する東京に集中するという流れになってしまった。では東京でしかこの種の仕事は成り立たないのであろうか？

環境は激変した。パソコンの性能が、飛躍的に向上し、小型化した。また、インターネット、光ファイバー網等の普及により、通信環境が飛躍的に進歩し、情報交換、データ交換が容易に出来るため、クライアントの傍で開発することも、目の前で打ち合わせすることも必要としなくなってきた。通信環境さえ整っていれば、どんな場所でも仕事が出来ると時代になってきた。白鷹でもソフトビジネスが可能となってきたわけである。

白鷹町アルカディア財団は六年前に情報開

発部を立ち上げ、白鷹町の情報化の推進とニュービジネスの可能性を探るため、ソフト開発・人材育成等、さまざまな事業を実験的に展開してきた。中でも「地図情報システム(GIS)」開発に確かな手ごたえを感じている。きっかけは、隣町の白川土地改良区から受注した総合管理システム開発である。水路、施設、賦課、農地の管理を総合的に行うまったく新しい地図情報システムである。

今までの常識では、このようにボリュームの大きい仕事は、間違いなく東京に発注されていた。仮に我々が受注出来たとしても下請け仕事としてのデータ入力位のものであったろう。事実、財団スタッフだけで完結出来る仕事量ではない。ここで我々は元請けとしてこの仕事を受注するため、テレワークという概念を取り入れた。

テレワークとは、直訳すれば遠く離れて仕事をするという意味になる。一つの仕事を分割・パーツ化し、遠く離れた場所のエンジニアがそのパーツ・パーツを開発し、集めて組み立

Value Sight テレワーク

地方の情報ビジネス起こし



てるという手法である。インターネット上にバーチャルな会社が設立され、それに参加するエンジニアのコラボレーションで仕事が出来上がって行くというイメージであり、一般的に言われている勤務形態としてのテレワーク概念ではない。

田舎にも、探してみればさまざまな需要が存在する。しかし、それを開発出来る技術者は田舎では絶対的に不足している。それならば、技術者がふんだんにいる都市部とネットワークを組み、データはインターネットでやり取りし、従来のような場所移動をすることなく、安くて良い物を作り上げようというものである。

メインフレームは財団スタッフと大阪のエンジニアが担当した。データベースの作成は、白鷹のワーカーと、以前から翻訳事業でコン

ピを組んでいるモンゴルのスタッフが担当した。モンゴルスタッフは日本語に精通し、優秀でなおかつ人件費が安い。競争力アップにはまず必要なスタッフとなる。賦課の部分はテレバイター(テレワークアルバイター)と呼ぶ、山生さんをお願いした。リスクと利益が財団に残るという仕組みである。

このように書くと、すべてネット上で事足りるように感じるが、人的ネットワークの形成はそうは行かない。真ん中に白鷹の地酒を置いての、夢いっぱいの酒飲みの席からしか生まれぬ。大阪のスタッフは仙台の仲間が媒体となってくれたし、モンゴルのスタッフはアジア国際音楽祭が出会いのきっかけである。そこにはいつも、白鷹の地酒「加茂川」があった。

また、我々は、インターネットと酒を組み合わせた面白い遊びを実施しており、大変好評である。「しらたか平成蔵人考」という大人の道楽で、先日第四回目の蔵出しをやり、大いに搾りたての新酒を楽しんだ。

事の発端は、飲むと偉くなる、あまり酒癖のよろしくない某有名シンガーソングライターの中途半端な酒の講釈から始まった。これに、同席していたこれまた同様の酒癖の杜氏が絡み、この杜氏の中途半端な米に対する講釈に怒りを覚えた生真面目なプロの百姓が絡み、いつの間にか同席メンバー全員で、自分たちで米を育て、自分たちで酒を仕込んで呑んでみようという事になった。酒の勢いは恐ろしいものである。結果、プロ百姓氏は田んぼを、杜氏は酒蔵の仕込み樽を提供することになってしまった。

いよいよ米作りが始まった。田舎育ちで、

米作りは一〇〇%理解していたつもりだが、無農薬有機栽培というルールでの米作りが、これほど大変なものだとは思わなかった。この馬鹿な遊びの悪戦苦闘振りを逐一インターネットに掲載したら、世の中に同じ馬鹿は居るもので、全国から三百五十人の会員が集まった。

酒の仕込みは感動です。良い酒が出来ますようにと祈るしかない人間の無力さと、日々変化する自然の営みの神秘に触れて過ごす一カ月は、命を胎内に宿し過ごす女の十月十日に通ずるとつぶやいた会員の言葉に共感を覚える。すべての会員が実作業に参加するわけではないが、農作業に参加するメンバーの大半がデジタル系の職業に付いている人間と二十代の女性であるという事に、大変興味を覚える。彼らが、田舎暮らしの魅力に敏感に捕らえているのであれば、山形の未来は明るいかもしれない。彼らの行動は常にクリエイティブであり、新鮮である。

テレワーク学会のある先生に言わせると、この遊びも立派なテレワークだそっだ。テレワークって一体なんだろう？

太田 荘一郎

財団法人白鷹町アルカディア財団事務局長
1948年白鷹町生まれ

1971年神奈川大学卒業後、吉野石膏株式会社へ入社。1986年長男の宿命で白鷹町にUターン、白鷹町アルカディア財団に入る。1999年から現職。